

日時 平成14年5月15日(土)

場所 つくばインフォメーションセンター大会議室(つくば市吾妻 つくばセンタービル内)

テーマ 『1300年前、つくばは自前の文化を持っていた!これからのつくば文化は?』

司会(講師紹介)

今日のテーマは「つくば今昔物語」です。

つくば市は科学の町として浮上してまいりまして、世界的にも知られている町ですが、つくばは科学の他に何にもないと思っている人もおられるようです。まだ発展途上の町ですから、色々な意味で未開の土地のように「つくばに文化はない」とおっしゃった方もいるほどで、色々と言われてきた町です。しかし、よくよく考えてみたら、つくばには1300年も前から独特の文化、独自の文化があったのです。みなさんご存知のように『常陸風土記』もありますし、万葉集にも詠われております。その他、江戸時代には筑波山神社は幕府から大変厚遇されていた神社ですし、漢字の「筑波」と平仮名の「つくば」、どのようにこれから古い文化と新しい文化が融合して自前の文化が作られていくのかを、私達は今ここでもう1度考えてみても良いのではないかと思います。昔のつくばの文化を改めて勉強してみようと、つくばの郷土史に大変造詣が深い、前つくば市教育長の井坂敦實先生からつくばについて色々とお話を伺いたいと思います。みなさん、今は無い、もう少し前の、あるいはずっと前のつくばについてのお話しをお聞きになって頂きたいと思います。

「つくば今昔物語」パート

講師 前つくば市教育長 井坂 敦實氏

この人間学講座は過去36回開催されたそうですが、私は今日が初めてです。36回の人間学講座に何度かおいでになった人は何人位いらっしゃるか、ちょっと手を挙げてみて頂けますか? だいたい20名ですね。

今日の講師である私ですが、人格円満にして学識経験豊かではあり得ません。とんでもない男で根が野人です。言う事はデタラメ、独断と偏見の男です。いつもの人間学講座の品位を汚すようで甚だ申し訳ないですが、朝倉さんのたつての要望ですので、今日は出させて戴きました。教育長などと言われますと本当に困ってしまいます。私は、自分が教育長に相応しい人間であるとは、8年間ずっと思ったことはありませんでした。ただ、子供達の将来を考えることは人一倍です。それで満足して戴いただけの人間です。

私が郷里に帰って来て、今年でちょうど30年経ちます。前半は27才まで親父の脛をかじって大学に行っていました。それから後半は、女房の細腕をかじって、ずっとひもで通してきました。ですから、つくば町長やつくば市の教育長になったのは、天の神様の悪戯(いたずら)としか思っておりません。このよ

うな事情ですので、人格円満な人にとっては顔をしかめるような甚だ卑猥な言動を発するかもしれませんが、私はあくまでも、歴史学、民族学の立場、しかも、土俗の伝承を非常に重要とする立場におりますので、そのような発言になりますことをお許しのほど、お願いします。

今日はパート1です。どなたにもお分かり戴けるものをパート1にしました。「筑波山に登る」というスライドを上映しながら、筑波山と筑波山麓の現在、並びに歴史的現象の話を行います。今日、成功するかどうか分かりません。パート1でもう沢山、パート2は来なくてもいいとなりましたら、私はこれっきりで終了です。もしパート2も呼んで戴けるのでしたら、筑波山と山麓に広がる歴史と文化について、もう少し詳しいことを申し上げたいと思います。

では始めます。

私は古い絵葉書や写真を集めておまして、これはその1枚です。昔、土浦から岩瀬まで40キロちょっとの間を筑波線という鉄道が走っておりました。今は廃線になって、その跡地にリンリンロードという自転車道が出来まして、この25日に完成祝賀会が行なわれる予定です。その筑波線の筑波駅前の風景です。

鉄道は大正7年に敷かれまして、その後、駅前の町作りが行なわれました。この街並みが出来た時に、この桜の木が植えられましたので、枝ぶりから判断しますと大体10年か15年経っている状況ですから昭和初期の写真でしょう。

もうひとつは、ここに石造の鳥居が建っていますが、これは昭和天皇の御成婚を記念して建てられた鳥居です。「筑波山へ登る」という題です。

市内でこのお話を致しますと分かるのですが、市内に10年以上も住んでいても、筑波山へ一度も登ったことの無い方が時々います。筑波山にはこの道を通って、こう行くのだと言ってもおわかり頂けない場合があります。

筑波山への登山道は、この鉄道が出来てから大きな道が出来たもので、現在は駅前のこの鳥居の裏を自動車で上がって行く形になります。しかし、それは、大正7年に筑波駅が開設された後、登山道の変更に従ったものです。昔からの筑波山の登山道は、筑波駅のもうひとつ手前にあった北条駅の町の中から出発することになります。私の「筑波山に登る」は、その江戸時代から続く昔の街並みを通ってまいります。

これが、北条の仲町にある筑波山への登り口で、石の道標に「これよりつくは道」と書いてあります。正徳という年号の時に建てられた2回目の石碑です。最初につくは道が出来たのは、後で説明しますが、筑波山の堂社が3代將軍家光によって寄進され、それが完成したのが寛永の10年で、1630年頃になります。そしてその時に、筑波山まで大きな材木を運ぶための道路として作られました。それがその後、参詣道に変わります。ですから、最初の道標はたぶん、寛永まで遡らないでしようが、一度建てられています。それで、沢山の人に来るようになりました。

この石碑は先端まで含めると3メートルを超える大きな道標です。この道標に

も面白い話があります。これには「左おふそね江戸」と書いてあります。今の「おおぞね（大曾根）」です。「おおぞね」は、ふりがなをふるのでしたら、「はひふへほ」の「ほ」を取って、「おほそね」と書かなきゃいけない。ところがこれは「おふそね」、今で言えば、「おうぞね」です。書家の人が書き方を間違えて自殺したという話です。石に彫ったものですから、今更、訂正出来ません。

この道標は明治の末期頃の写真です。こちら側は今でも洋品屋をやっています足袋忠さんというお宅です。こちらのお宅は差し障りがあるから言いませんが、城山が崩れてもこの家の身代は崩れることがないと言われた程の北条一のお大尽でした。それほど言われた身代も、ご覧のように、今や跡形もありません。どうか、良いご子孫を作ってください。私はいい加減な子孫で、親の資産を食って生きているようなものです。ですからあまり偉い事は言えませんが。

これは今の北条の町並みです。ここは横町（よこまち）と言いますが、ここを過ぎますと、次に神郡（かんごおり）という集落に入ります。神の郡と書きますから、たぶん、筑波山の御神領として、かなり古くから伝えられた土地だと思いますが、現在のところ、そのいわれは漠然としており分かりません。ここに黒い門、通称黒門があります。総門です。このお寺が普門寺といいます。これは小田四箇寺と通称されている4つのお寺の筆頭寺院ということになっています。小田氏は中世を通して400年にわたり、つくば市の西北の隅にある小田という所にお城を構えた名家で、15代続きました。現在、発掘調査を進めておりますが、ほぼ300年間の歴史が地下に埋もれていることが分かりつつあります。

これは希有のことです。普通はどんなに殿様が続いても、中世における城跡は、放棄されて別の所に移ったりしますから、300年間、同じ所に住んでいる城主はあまり多くはありません。今度の発掘調査の結果、ほぼ300年間、小田に住んでいたことがどうやら証明されそうで、これは大変なことです。発掘の成果については現地調査の説明会を毎年行なっていますので、来て戴きたいと思います。

その小田氏が自分の領内に真言宗の寺院を4つ建てた、ということになっています。これは伝承ですから事実は分かりませんが、その筆頭が普門寺です。残る三箇寺は、霞ヶ浦町加茂の南円寺（なんえんじ）。それから、土浦市大岩田の法泉寺。それから、これまた同じ土浦永国（ながくに）の大聖寺。でも、永国の大聖寺は移ったのは江戸初期で、それまでは市内の平塚にあったという説があります。このあいだ、その辺りを発掘調査しましたが、跡が分かりませんでした。どうやら、国土地理院の敷地内にお寺やお墓があったようです。

これが、その普門寺の総門で、黒いから通称は黒門です。奥に赤い門がありますが、それが赤門です。この黒門ですが、非常に傷みが激しくて、垂木も柱も後世の物に変わっていますが、ここの桁、それから、こちら辺の、太瓶束（たへいずか）と言いますが、こういう部分を見ると、少なくとも400年位前に建てられたと思われる古い物です。文化財は難しく、経年変化を迎えるうちに柱が

腐り、屋根が腐りすると、どうしても元のままに揃っているものは非常に珍しくなります。ましてや、建物の保存は容易ではありません。部分的に見る限り、かなり古くに建てられたものであることが分かります。

これが黒門を出て、赤門に出たところです。この赤門も調査の結果、江戸時代の初めに筑波山神社が家光の代に建てられて以後、筑波山の煌（きら）びやかな建物を見た地元の大工さんが、初めに建てたのではないかと思われまます。おおよそ、明暦の時代位で考えています。残念ながら、やはり後世に改造を受けておりまして、柱などは取り換えております。ここに小さな石碑が建っていますが、これを建ててくれたのは那珂湊の人です。わざわざ那珂湊からお出でになって、寄進して下さったのです。

天狗党の乱に加わった飯田軍蔵という人の功績を顕彰するために建てられたものです。知っている人は知っている、知らない人は知らないと思えますが、天狗党は栃木県の栃木市近くの大平山で旗揚げして、そこから歩いて筑波山に来て、筑波山で決起します。そして、時の将軍、徳川慶喜に尊皇攘夷を迫るわけです。その後、流れ流れて越前福井で鯨（にしん）倉に閉じ込められて哀れな死を迎える話をご存知でしょう。その飯田軍蔵の功績を称えるために那珂湊の人がわざわざ建ててくれたのですが、地元の人には天狗党のことを良く思わないのです。

天狗党は、水戸藩士もいましたが、坊主に神官、それに百姓という混成軍団でして、軍資金も何もなくて旗を揚げまして、実に無謀なる戦いです。そういう戦いを始めたものですから、軍資金がなくて食料の調達も出来ません。食わなければ戦争になりませんから、彼等は何をやったかという略奪です。近郷近在のお金持ちの家に行っては、刀をちらつかせて「お前等、金出せ」というわけです。山麓のあるお宅の門の柱を見ると、そこに刃の跡があるのは、天狗党の乱の時に兵士達に傷付けられたものだという伝承が残っています。こりこりだということで、地元の人には天狗党のことを少しも良くは思いません。それで、水戸に行けば天狗党様ですが、地元では何にもしないものですから、こういう石碑を他の人が建ててくれたということです。

これが普門寺の本堂です。建物は残念ながら18世紀後期の物です。ご本尊は入っていますが、秘仏ということで見せて戴けません。見せて戴ければ、年代が分かってしまうことがあります。でも、お寺さんというのは秘仏として持っている物について幾ら学術上貴重であると言いましても、それを見せてもらうのは憚ることでした。従って、ご本尊が何時の物であるかは分かりません。ただひとつ、このお寺は小田氏の6代目辺りが建てたということで、そのお墓と称する五輪塔がこの本堂から南の方へ200メートル程行った山腹に残っております。残念ながら、原型がそこなわれており年代は確定出来ません。少なくとも室町時代、15世紀頃であるだろうということは推定されております。

本堂は粗末ですが、この左側にある客殿が立派でして、これは本堂よりも古くて、宝暦の時代ですから18世紀の半ば頃に建てられた大きな建物です。夏は本当に涼しいので、ここで昼寝をさせてもらいたいものです。今、ここの和尚さ

んが高校の校長先生をお辞めになって、お茶の接待をしてくれていますから、春の花、秋の紅葉の頃、どうぞお訪ね下さい。無料でお茶をご馳走になれます。この客殿は江戸時代中期の建物として素晴らしい物です。

寺宝の中で1番大きいものが、この絹製の曼陀羅、胎蔵界と金剛界です。こんな立派な物をお葬式の度に死んだ人の家に持って行っていったのです。もったいないことをしたと思います。だから、もうボロボロです。何千回と御出ましがあったと思います。江戸時代のものですが、大体スライドで今映しているこの大きさが原本くらいです。

これは絹が1枚で出来ていますが、普通は絹の幅というのは皆さんの着物の幅ですから、これは3幅分位あります。それが1枚であるということは、よっぽどのお金を持っていたということです。最盛期で250ヶ寺ほどの末寺があり、今の筑波郡のほぼ大半の真言宗のお寺が、この普門寺の支配を受けていました。

今ご紹介した普門寺さんは、この神郡の入り口のこの部分です。北条の町から来た道はこう行きます、ここで右へカーブします。これが神郡の街並みです。この道を真っ直ぐ行くと、これが元の名主屋敷です。ここから先が面白いです。

実は、江戸時代以前の道は真っ直ぐではなく、ここを折れてこの竹藪の脇を通って行くと、江戸時代の道です。ところが明治維新以後、近代的な行政組織が出来ますが、町というのは筑波町と北条町ぐらいしかなくて、その頃は経済面で予算が非常に少なかったもので、ひとつの町や村が道路を整備することは出来ません。そういう時は、当時、県の下部組織として郡役所というのがある、筑波郡の場合、谷田部の方にありました。郡役所は国の予算を県が受け、その県の予算を郡役所が受けて、土木工事は全て郡役所がやります。その時に、この道を真っ直ぐにし、ここにあったお宅の庭の真ん中に道路を通してしまったのです。お役所のやることはいかに馬鹿げてるかというのは、100年位前からそうで、横暴だということです。本当にこの家は困ったと思います。真っ直ぐ行けば筑波山に登りますが、この辺から右へ曲がると蚕影山（こかげさん）神社へ行きます。ここは日本唯一の養蚕の神様として知られている神社ということで、地元では自慢をしています。この山道を行き付いた先、この石段を登って、神社へこれからお参りしますが、その前に、春喜屋さんという茶店の説明をしておきます。

皆さんご存知のように、実際に養蚕が盛んになるのは明治維新が終わった後で、言ったら悪いのですが、当時の日本が西洋と貿易をする時の産物としては、絹織物しかありませんでした。例えば、横浜に三溪園という有名な所がありますが、この庭園をつくった原三溪という人は生糸の貿易で財を成したのです。当時、この筑波表も一斉に養蚕業を始めますが、それは全国的なことです。

皆さんご存知の話で言えば、「ああ、野麦峠」も明治の殖産興業の一環として絹織物を生産するようになって、あのような悲劇が起きます。蚕影山神社はそ

の養蚕の神社として日本1社だという人がいますが、江戸時代は絹織物の神様ではなくて木綿の神様でした。何故なら、当時の絹織物は非常に高価なもので、普通の人には着ません。普通の人には木綿です。絹織物が盛んになり出したのは明治半ば頃です。その後、筑波鉄道が大正7年に開通して、日本全国、北は岩手県、南は長野県から養蚕業者がお参りに来るようになり、春喜屋さんの先々代がここで商売を始めて、ここに定着します。多い日には、1日に米2俵位も炊いて、参詣者の食事をまかなったということです。ところが、100年の歴史の変遷というのは面白いものです。今や養蚕業なんて何処もやらないので参詣人は1人も来ない。春喜屋さんは閑古鳥が鳴いています。

では上がります。急坂だから急いでは上がらないで下さい。くたびれますから。私でもくたびれてしまいますから、お集まりの皆さん方はもっとくたびれてしまいますね。拝殿はこうして人が沢山来るようになった大正頃に新しく作られた物です。右側にあるのが絵馬殿です。埼玉、千葉、群馬は当たり前で、色々な各地の人が奉納してくれた絵馬が飾ってあります。昔はもっと沢山あったらしいのです、今のうちなら記録に残せるのですが、長野県から来て奉納した額も1面だけ残っております。

この右側を登って本殿に行きます。神社にお参りする時は、10円か100円か知りませんが、ここにお賽銭をあげて、パンパーンと柏手打って、欲望剥き出しの願いを神様にお願いして、みんな帰って来てしまいます。少しは神様の本体を見て下さい。拝殿だけを見ないで、後ろの本殿も見て下さい。上に行くと、これが御本殿です。御本殿は木鼻とか繰形の彫刻や絵様から17世紀後半位の建物だと思います。ようやく数年前に屋根が鉄板で葺き替えられましたが、荒れていて見るも無残で、何時腐って倒れてもおかしくない状態です。少なくとも17世紀後半の建物は、そんなに残っているものではないのですが、文化財にするには規模とか年数とかが、やはり足りないのです。これが500年以上前の建物だったら、はっきり文化財に出来るのですが、400年から300年の間となると、よほどのことがない限り文化財に入りません。従って、こういうものは朽ち果てるに任せるしかないのです。

数年前ですがここに穴が開いてミツバチが入って、本殿の中に大きなミツバチの巣があります。面白いのは、そのミツバチを利用してやろうと、本殿の縁下にミツバチの巣が置いてあります。考え付く人は考え付くものです。これは本当に珍しいニホンミツバチで、西洋ミツバチのように大きいものではなく、1センチよりももっと小さいです。私がこういうことを喋っているせいか、ようやく瓦屋根が鉄板葺きに直りました。もう少しは保つと思いますが、養蚕の復活はあり得ませんから、昔の盛況はもうあり得ないと思います。

ここの神主さんは稲葉謙三というお方でした。90幾つかでお亡くなりになるのですが、最後は山に登れなくなり、春喜屋さんの庭先でお祀をしておりました。神社の行く末を非常に案じておられましたが、一応、今は筑波山神社に管理をお願いしております。

神郡の地区を右へ曲がった道を元へ戻ります。すると、僅かですが、昔の筑

波山登山道の面影を残すお宅が残っていて、表は土蔵店です。ここが土蔵で、格子戸が入ってお店になっております。このお宅は桜井さんといいます。ここに門があり中に入ると純然たる農家風のお宅で、農閑商渡世ということ。つまり、農業が忙しい時には百姓をやり、そして参詣人の多い時、あるいは農業が暇な時には商売を営むということです。昔はこういうお宅がここに3、4軒揃っていましたが、今は桜井さんのお宅1軒だけになってしまいました。これもなんとか残したいのですが、文化財の認定条件には合致しないもので、ご当家がどれだけ残して頂けるかに掛かっております。今のところは風前のともしびのようです。

神郡の集落を通り抜けます。この辺が神郡の集落で、これが臼井の集落で、これが筑波山に登る道で、これが筑波山です。今の道をまた北進します。この写真、懐かしいでしょう？この間、ある所でこれを上映したら、「これは俺だ」という人がいました。もう70幾つですね。覚えているのです。私の子供の頃は、筑波道はこういう風景で、車1台通るのがやっとの砂利道でした。この看板には「自転車預かり所」と書いてあります。大正7年に開通して以来、筑波鉄道沿線の人はこの鉄道を利用して、筑波山にお参りに来ますが、筑波線の沿線ではない、大穂、豊里、谷田部、水海道、取手の人は自転車で来たわけで、そういう人達のために、この場所に自転車預かり所の看板がありますが、ここ1軒ではなく、あと2、3軒ありました。この道を真っ直ぐ行けば筑波山ですが、また寄り道いたします。

右へ曲がります。これは、今の道を曲がった所の突き当たりの六所という集落にある六所大神宮という神社です。今、六所神宮は廃止されてしまい、残念ながら跡形もありません。大体、ここから向こうまで境内が200メートル位あり、物凄い神社でした。ここでは触れる時間がないので後で言いますが、これは筑波山神社が神仏習合の結果仏教一色になってしまった時代に、筑波山の神様を神として祭祀するために創設された神社だと思われる場所です。筑波山の御座替りというのは筑波山神社にとって最大のお祭りですが、江戸時代からその以前、全て御座替りを仕切っていたのは六所神社なのですが、恐らく、鎌倉時代の初期にはもう存在したと思われる古い神社です。しかし、残念ながら、神郡の人が居ると悪いのですが、神郡の集落の人が、この神社は維持出来ないと行って、明治何年かに廃絶してしまいました。

六所神社がかって所蔵していた御神宝は沢山あったのですが、今はその多くが失われてしまい、わずかに三件だけが、散在して残っています。

先ず、あるお宅に残ったのはこの鏡です。この鏡の表に「坂上田村麻呂寄進」と彫ってあり、これは平安時代の人間の名前ですがインチキです。この紋様を見ただけで、これは平安時代の鏡ではないと分かってしまいます。正しくは、これは室町時代の鏡ですので、室町時代になって昔伝わっていた「坂上田村麻呂」が六所神社を建てたという伝承を元にして「坂上田村麻呂寄進」と彫り付けたことが分かります。

次の神宝が大変なものです。これは恐らく神社の祭祀に使った能面だと思われ

ますが、天正という年号がこの裏に書いてあります。能面の写真集を見ても、こんな恐ろしくて、非常に陰気臭い面は出て来ません。これも、あるお宅に保管されていた物です。

次の牛頭面、これが最高の面で、大きさは68センチ位ですが、残念ながら、片一方の角が欠けています。これは六所神社の祭祀で、お田植え祭りの時にこれを先頭に高く掲げて行列が練り歩いたという伝承があります。この牛頭面は彫刻としても重要文化財級ですが、残念ながら指定してもらっていません。もっと素晴らしいのは、この細工の素晴らしさと同時に、年代を証明するものが裏に書いてありますので、引っくり返して裏を見ます。ここにまず寄進した人の名前があり、それから、春桂という作った人の名前が書いてあり、年号が天文24年と書いてあり、きちんと全て入っています。こういうように、作者も知られ、寄進者も知られ、そして、作られた年代も分かることは、室町末期の作品としては非常に貴重な物ですが、残念ながら、これはさくら材です。さくら材は虫が非常に付き易いので数年に1回燻蒸処理していますが、こういう具合にボロボロになってしまいます。このままですと溶けてしまうので、処理する必要がありますが、100万円位出さないと駄目です。皆さんも文化財を愛する気持ちを起して、どんどん、お金がある人は寄進してくれればと思っております。

元の道へ戻って30メートル位行って、今度は左へ曲がり、山の方へ歩いた所に稲野（いなの）の弁天様という神社があります。つくば市には色々なお祭りがありますが、一の矢の八坂神社の夏祭りである蒜（にんにく）祭り、栗原の北斗寺の妙見様と、正月初巳の日の稲野の弁天様の3つが有名です。今は「いなの」と言わないで「いいな（飯名）」と言うようになっていきます。

石段を上がります。これは新しく出来た拝殿ですので、あまり良いとは思いません。ここにご本殿がありますが、実は覆屋（おおいや）で覆われていたので、ご本殿の撮影は出来なかったのですが、これは非常に珍しい本殿です。どこが珍しいかと言いますと、普通の神社は、平入り（ひらいり）と言って、屋根の垂れている所に拝む場所がありますが、このご本殿は奈良の春日神社のように、妻入り（つまいり）と言って、屋根の妻側にお参りする所があります。妻入りの神社は春日作りと称し、全国でも多くなく、ましてや茨城県には少ないのです。これは妻入りの本殿でして、非常に珍しい部類に属します。それから筑波山信仰の話を進めるうえで、飯名の弁天様が非常に貴重である理由のひとつはこの本殿裏の大きな石です。

要するに、大昔は神社には拝殿も本殿もありませんので、我々の祖先は大きい石とか大きい木を拜んでいました。そして、そこに神様が降りて来ます。今も地鎮祭の時に神主さんが出て来て、色々やるやつです。最初に神を降ろす儀の「降神の儀」があります。最後には神様がお帰りになる儀の「昇神の儀」があるわけです。ここに神主さんがいますので、こんなことを言っただけなのではないのですが、あの時、神主さんは頭を下げ、低い声で何やらブツブツ言った後、ウーだかアーだか分かりませんが、変な声をあげますが、あれは、あの声に乗っ

て神様が昇り降りするわけです。日本の神様はエレベーターもエスカレーターも使わずに、降りて来て欲しい時にウーと声を出せばすぐに来る。そして、降りて来たならば、今度は献饌をやり、その時になって蓋の付いているお酒の蓋を取って、神様にご馳走するわけです。それから、儀式が終わるとはいさようならと言った後、今度は撤饌と言いまして、そこに盛った色々な物に蓋をするという儀式をやります。覚えておいて下さい、神様はいつもこの岩の上に御出ましになっているわけではなく、お祭りの日になると、そこにお供え物としてお酒やらなにやら沢山の海のもの山のを置いて、神様のおいでになるのを待つということです。筑波山信仰の伝承的な形態を残しているのはこの大きな石です。ここの神様は、稲野の弁天様と言われているくらいですから、女性で、この大きな石は女性器に見立てられます。そこで、後世の人々は女性器だけでは寂しいだろうと、ここにあるような石、つまり男性器を建てるわけです。

これは稲野神社の御神宝です。鰐口（わにぐち）というものです。表に「常陸国北条郡臼井村 稲野宮鰐口」とあり、裏側には文明11年と書いてあり、これは1480年位のことですが、その頃に、これが稲野宮に寄進されていたことが分かります。

でも、これは筑波山中である人が拾ったのです。どうして、稲野宮鰐口が筑波山中にあったのか分からないのです。あるその拾った人が私にこれを見せて、「見てくれる？」と言うから、「こりゃ大変な物だ」ということになり、「俺によこせ」と言って、ぶん取っちゃったのですが、公共の遺物ですから、後で然るべき処理を致します。こういう鰐口の使い方ですが、神社やお寺の軒下に吊るされていて、そのわきに下がっている紐で叩いて音を出すものです。しかも文明11年、今から520、530年前の物です。こんな物が残っていることは素晴らしいことだろうと思います。

稲野の弁天様から上へは坂道ですからこれまた大変です。距離的には300メートル位なのですが、皆さんをここで歩かせると大体はくたばってしまいます。そこにあるのが、月水石（がっすいせき）神社です。ここに穴が開いています。昔はここから月に1度、赤い水がタラタラと流れ出たそうです。だから月水様、月水石神社と言います。昔、産婦人科のない時代は、ここに70、80のお婆ちゃんがいるから分かるだろうと思いますが、本当に女性は大変な苦勞をしたわけです。男は平気で酒盛りをしているかも知れないけど、女性は妊娠しても田植えも休めない、稲刈りも休めないという物凄い重労働です。私は昭和19年の10月生まれですが、お袋は身重の腹を抱えて、6月末、7月初めには田植えをしていたわけです。この年は、作谷の飛行場に爆弾を落としに来たアメリカの飛行機が、帰りに残った爆弾をそこら辺に落とすとしていくわけです。そういう目に合いながら私は育ったので、その時に脳味噌をおかしくしたのだなと思います。

ともかく、女の方は本当にどんな時だって休めないのです、体を壊してしまうのです。今でも、皆さん疲れれば生理不順になるとは思います、昔の方は、腰の

冷えなど病気の時にもお医者さんに掛かれないわけです。昔は、産婦人科などなくて、内科のお医者さんが数十部落のうち1軒あれば良いくらいでした。そういう時、女の方は縋る思いでこの月水様にお参りに来るわけです。この神社は個人の所有地です。その家ではここに茶店を構えられたくらい繁盛していました。

行って見て驚くと思いますが、本当はこのような写真を写してはいけませんが、北海道からここまでお参りに来ているのです。やはり、未だにどんな名医に診てもらっても治りにくい人は神様に縋る思いで、こういう所にいらっしゃるのでしょうか。そういう訳で、昔は本当にこの神社が繁盛したことが分かります。このような理由で、この大きな石が稲野の弁天様と同じ様に、これがご神体です。しかも、ありがたいことにタラタラと月に1回流れ出るのですが、科学的に考えてみれば分かるだろうと思います。この流れ出る理由は、はんれい岩が鉄分を含んでいるかどうかは別として、多分、雨が降ると雨水がこの穴の中に溜まります。溜まっているうちに、鉄分のような物が溶けると赤くなり、それが熱されると膨張して時々流れてくるのでしょうか。それを昔の人は知らないから、月の物が出ると考えて、信仰したのでしょうか。

今、こちらの方を脇道したわけです。また、筑波山へ登る道に戻ります。これは江戸時代に書かれた絵図です。残念ながら当時の写真はありません。ここを登ると本堂です。この登山道の両側に、こういう風に土産もの屋さん、それから宿屋さんや職人さん達が住んでいました。そして、宿屋さんにはもちろん飯盛り女がおりました。実は、私の祖父はこの地で生まれて、この地で83歳で死んだのですが、生涯1度も筑波山に登ったことありませんでしたが、何処へ行ったかという、毎晩この宿屋へ寄ったわけです。だから、尾のない狐に騙されたという歌が残っていますが、この一帯ばかりではないのです。遠くからは八郷の辺りから、真壁の辺りまで、みんな山越えで来る。男というのは嫌な性分ですね。

まず、この鳥居辺りを見て、それから黒門を見て、それからこの辺の風景を見ます。これが一の鳥居です。一の鳥居の裏側にあるのは文政年間に17代木村庄之助が寄進した句碑です。今の庄之助は30代位になると思います。「西、東、なんとかかんとかの花相撲」と書いてあります。反対側にあるのは服部嵐雪の句碑です。「雪は申さず先ず紫の筑波かな」と書いてあり、19世紀初めに寄進されたものです。それから、先程の絵図で見た黒門がありました跡、その礎石が今でも残っていて、この四角い石がそうなのですが、道端に転がっているから気が付かないのです。先程の登山道は元は全て石段だったのですが、今は車社会になりましたから両側の人が大変な苦心をして、全て車が通れるようにしてしまいました。あまりに急なこの部分だけが石段が残っております。

昔はこの石段の道が県道の筑波石岡線でした。ここへ来ると風情があります。でも、もっと驚きなのは、筑波山は逆転層で暖かいと言われます。冬でも太陽で暖められた空気が山腹に上がるので中腹が一番暖かいと言われますが、それを証明するのがこのベゴニアで、自生しているのです。我が家の庭でベゴニア

を植えておくと、霜でとろけてしまい必ず翌年は芽を出さない。ところが、みんなこれ自生しています。冬の寒さでも耐えています。いかに逆転層が本当に暖かいかということです。

これが、昭和14年に建てられた筑波山郵便局で、向かい側が局長さんの自宅です。この辺の建造物もなんとか保存したいのですが、個人の所有地でありお宅ですから、なかなか難しいところがあります。これは、その上を登った所にある昭和初期の門前町の風景です。これは、江戸屋の新館で、これは江戸屋の本館です。これが対宝館かな？ 3階建てのお土産屋もありました。

今、ご質問が出たのですが、筑波の門前町に宿屋があり飯盛り女がいました。そして、飯盛り女というのは、飯を盛るといのはうわべで、春を売っていたわけです。その遊女のお墓が残っているのか、と聞かれたのですが、残っています。ケーブルカーに乗る登山道を途中から左折して、滝田丕さんという方のお宅の少し後ろの上の方になります、私もあまり良く見ていないのですが、そこに現在も残っていることを滝田さんから聞いております。哀れな女の運命を多少は悲しみ、弔って戴ければと思います。

筑波山に登るのは容易ではありません。歩いても2時間かかります。私のお喋りも延々とやった時には3時間でも4時間でもやります。その道を登って行きます。まず、左上に石垣があります。今は筑波山は筑波山神社となっておりますが、六所神社の所でお話しした通り、実は神社になったのは新しいことで、それまでは筑波中禅寺というお寺だったのです。これは、平安時代の初め頃に奈良東大寺の僧、徳一というお坊さんが筑波山にお出でになって中禅寺を開き、それ以後、ご承知のように、神仏習合、神様も仏様も一緒になった形で筑波山は崇拝されたわけです。そしてもちろん筑波山には神様はそのまま居るわけですが、お祀り方は中禅寺のお坊さんがお経をあげたり、純然たる仏教としてのやり方です。そして、これを見ても分かるように、大御堂（おおみどう）、三重の塔があり、鐘撞堂があるくらいです。それで、明治4年の廃仏毀釈の結果、筑波山神社にまた戻るわけです。

この図で描かれているのは、寛永十年の時に全山の堂社が家光によって寄進され、一新した時の情景です。何故徳川将軍家が筑波山を崇敬したかと言うと、東京の江戸城から見ると、筑波山は東北にあたるわけです。年配の方はご承知でしょうけれど、東北は丑寅の方角に当たり、鬼門になるわけです。

ちょっと面白い話をしましょう。鬼門、鬼の門。東北方と言って、この方角が丑寅に当たり、これが鬼門と言われるわけです。たあいの無いことです。実は私も今度家を新築したのですが、その時にお袋はもう80歳ですので、鬼門を非常に嫌がりましたので、筑波山神社にお願いして鬼門払いをしてもらい、なんとか新築したのですが、本当のところ、私は鬼門なんて信じたくはないのです。

鬼門という言葉は、中国の山海経（さんがいきょう）という古い本に初めて出て来ます。東方海上に島があり、その島に度朔山（どさくさん）という山があって、大きな桃の木が生えていて、それを上から見ると、何千丈という枝が

伸びていて、その東北の所に穴があり、鬼が出入りするという伝承が、中国の2000年以上前に書かれた本に出てくるわけです。ただそれだけの話です。なんでそれが鬼門なのですかね、私は迷信だと思います。しかしこんな事言っても、現代の人を含めて7割の人がわけがわからぬまま鬼門を恐れているわけで、多勢に無勢でかないません。

面白いのは、ここから先は私の偏見とデタラメですが、ここに鬼の住む世界があるわけです。そして、これは鬼の住む世界を横から見たところですが、この東北の所に穴があります、その鬼の世界と人間の世界を繋ぐ穴がどのように繋がっていたかが問題です。一般的には、今言われたように、人間の世界はこれに丸々と乗ってしまう形になります。つまり、上から見れば、東北方の鬼の世界に人間の世界が丸々乗っているのだから、どちらも穴はこの東北方で繋がっているわけです。そして東北が鬼門ということになります、ところがこの東北に対して、今度はここ西南を裏鬼門と申します。もし、これがどのように繋がっているのかという時に、私が考えているのは、今度上から見ますと鬼の出口が東北にある時に、人間の世界がその上に丸々乗らず、ズレていて、ハスカイに繋がっていたらどうなるのか？ そうすると、鬼の世界から東北方は、人間の世界の西南方ということになります。先にちょっと説明しましたけれども、昔流に方角を十二支で考えてみれば、西南から西北は申（さる）・酉（とり）・戌（いぬ）にあたります。桃太郎が鬼が島の鬼を成敗するのに従った家来は、猿、鳥、犬。つまり、この桃太郎の話の時は、私は裏鬼門が本鬼門であったと思うのです。確かに丑と寅では家来にならなかったでしょう。そういう訳で、徳川家康の時から江戸城の鬼門として扱われてきましたので、3代将軍家光がこの堂社を寄進したわけです。正確な数字は出ていませんが、寛永に作られて50年後に修復する時は、千何百両掛かったらしいので、この時は万単位のお金を使っているわけです。

これは、地元の人が書いた中禅寺境内図です。この真ん中に大御堂という、大きなお堂があり、その脇に三重の塔があります。この辺に真鍮で出来た大仏様があります。上の奥の方に、十一面観音堂があります。これは全部、明治の廃仏毀釈の時に、お寺関係の物は全部廃棄されてしまいます。もし残っていたら、成田山新勝寺のように繁盛したと思います。この銅の金仏様は霞ヶ浦の地に捨てられてしまいました。今は東京のお寺の護国寺にこの金仏様があります。中国の文化大革命が日本でも今から120年前に行なわれたというわけです。廃仏毀釈の結果、神社になって拝殿が作られたのは、記憶がちょっと危ういですが、明治12年か19年です。

これは、現在の神社です。でも、本体は全然変わっておりません。日本の木造建築の素晴らしさです。要するに、この向拝（ごはい）を綺麗にただけで、拝殿の上の方もここに継ぎ足しただけで、全然手を加えてないのに、お堂があんな風になってしまいました。これが木造建築の良さです。コンクリートではこんな風にはいけません。その神社の前に、こういう風に石がいっぱい置いてありますが、これを皆さんは腰掛け石だと思っているか、あるいは子供が飛

び歩く石とっています。実はこれを見ても分かる通り、元はここに柱が立っておりまして、こちら側に土台があり、こちら側にも直角に土台がありました。これは、ここに柱が立っていた証拠です。つまり、これは元の筑波山中禅寺の堂社の礎石です。それが今、境内一面に散らばっているわけです。ほんとに勿体無いですよ。仏罰が下ります。でも、もっと酷いのは、歴代のお坊さんの墓は今の神社の上に並んでいたのですが、廃仏毀釈の時、全てこのように蹴落としてしまったのです。これはケーブルカーの登山道です。これは男体山へ上がる鳥居です。その辺りを見て下さい。この辺りにも転がっていますが、これがお墓を全部蹴飛ばした跡です。見るも無残ですよ。今のは文化的嵐の話です。もう1つ注意して頂くために、自然の嵐についても触れます。

昭和13年に、土浦市を含めてこの辺が大水になりました。その時、筑波山は1週間前から長雨が続き、その後、最後の2日間位で600ミリ位雨が降っています。そのせいで、これは筑波山に山津波が起こった跡です。死者が2人出ています。山津波が通った跡が、江戸屋の裏側の千手沢に、あの深い抉りが出来てしまったのです。それまでは、チョロチョロとした水がここを流れていました。このように自然の災害はいつ何時起きるかも知れない。実物を見てもらうために、貴重な写真をお借りしてスライドに撮らせてもらいました。

元に戻りまして、神社をご案内します。これが現在のご神橋です。これは、御座替（おざがわり）というお祭りの時に、神様がお渡りになる橋です。年に2回、春の御座替と秋の御座替の時、ここを神様が歩くわけです。この時だけは皆さんもこの行列に従って行けば歩かせて頂けます。赤く塗ってあるのは、東京の奇抜な信者の方が10年か20年に1度、ちゃんとただで塗ってくれるのですが、本物の漆ではなくカシューです、本物の漆では大変お金が高いです。これが、そのご神橋の妻側です。正面は三角形になっていて、この真ん中にあるのが太瓶束です。太瓶束の先端部が結綿（ゆいわた）で、その両脇にあるのが笈形（おいがた）です。こういうつくりや文様は正に寛永時代の物に間違いのない素晴らしい物です。これには安土、桃山時代風の心意気が残っています。

ご神橋を過ぎて階段を上がりますと山門に当たります。現在は隋神門。お寺時代は仁王門です。今のところ、県内で大きい方の門です。お寺時代は、ここに仁王様が居たわけです。それで、神社になったから仁王様を追い出したわけです。その追い出された仁王様は松塚の東福寺に移動したと言われていました。それから、その後ろ側の1段高くなった所に、さっきの絵にも出て来ましたが、鐘撞堂があったのですが、これも神社ではないということで、現在は泉の慶龍寺という子育て観音で有名なお寺に移されています。これを抜けて左へ曲がりますと。巖島神社があります。1間と言っても、6尺あるかないかの小さなお堂ですが、妻入りの神社としては非常に珍しいです。ついこの間、漆で塗ってもらいましたが2000万円かかりました。そんなに驚かないで下さい。文化財を守るというのは大変なことです。2000万かかるのはしょうがないですよ。まず、漆は大変高いです。やはり、外国産の漆では日本の風土には合わないのです。次に職人がいない。今現在、漆職人は何処に頼むかと言うと、日光

の職人さんに頼みます。日光というのは、職人さんが食っていけるのです。日光の2社1寺全て漆を塗り替えるのには、50年掛かるわけです。それで、50年経って一巡すると、次の仕事を、また50年します。50年に1度塗り替えていく限り、あそこでは職人さんが食えるわけです。他では食えないのです。筑波山神社で50年にたった1度だけだったら、商売にならないわけです。だから、わざわざ日光から職人さんに来てもらったから、その職人さんの手間代なんて、膨大なものです。だから、手間代が半分、材料代に半分ということです。まあ、幸いにして、筑波山神社はお金持ちで、自腹でやってくれましたけど、大変なことです。これは、その修復前のスライドです。比べてみると、本当に綺麗に仕上がっています。

面白いことに、筑波山神社は神様を表示するのは、全て蟄股(かえるまた)の彫刻で表示されています。この正面にあるのが蟄股です。蛙が股広げて踏ん張ったみたいでしょ？大工用語というのはストレートですから、難しい事は言いません。足を踏ん張ったような蛙の足型です。

これは、蛇が浮き彫りされています。ここからこう、とぐるを巻いています。私は今度の修復で白蛇になるのかと思っていましたが、残念ながら元の色彩に復元して茶蛇になってしまいました。巖島神社というのは弁天様ですけど、弁天様のお使いというのはよく、白蛇弁天なんて言われる、白蛇なわけですよ。その神のお使いを表していますが、後の神社も全てそうです。左側に筑波山神社の拝殿があり、その右側にこれも神社だから残った、日枝神社と春日神社の拝殿、本殿があります。これが日枝神社で、こちらが春日神社です。この2つがあって、その2つの神社を1つの拝殿で間に合わせようという、ちょっとややこしい拝殿です。これは割り拝殿形式といって、真ん中が通路になっているのですが、両脇とも畳が敷けるような配慮がされている。

何故このようになっているかと言いますと、神様が違ってお祭りする日が違うのです。だから、片方のお祭りの日はこちらの拝殿を使い、こちらの神様の時はこちらの拝殿を使います。このように使い分ける拝殿を割り拝殿と言います。これも寛永10年の物です。次に拝殿のうしろの右側が日枝神社です。左側に並んでいる春日神社と同一の大きさの神社ですが、これが何故日枝神社だと分かるかと言いますと、日枝神社というのは琵琶湖のほとり、近江の坂本という所にあるわけですが、そこのお使いは猿です。で、筑波のこの日枝神社の蟄股に「見ざる、言わざる、聞かざる」の3猿を彫っています。皆さんは3猿は日光ばかりを言いますが、筑波山神社にもあります。それで、こんな事を言うと郷土自慢になってしまいますが、日光は出来たのが寛永14年で筑波山神社は10年ですから、日光よりも4年早いのです。こんなにつまらない事にこだわっても仕方のないことですけどね。地元としては、小さい事ですが、それ位臆しないといけません。ついでに言いますと、筑波山中禅寺は幕府のお達しで作られる、立派な幕府の事業として作りましたが、その時、大工の棟梁というのが幕府御抱(おかかえ)大工鈴木近江守長次という人で、この人はここを終わった後、今度は日光の奉行に任命されます。それで、筑波山で働いた人も、

やはり、日光へ行っているはずです。

こちらが春日神社です。墓股に鹿の彫刻があるので、それと分かります。何故そうなのか？春日神社というのは本家本元が奈良公園の中にあるというのは知っていますよね？それで奈良公園の中には、鹿が沢山いますが、それは創設以来、春日神社のお使い神として鹿が信仰されているから、飼われているわけです。では、その鹿の発祥地が何処だか知っていますか？そうすると皆、東大寺かなと思ってしまいますが、発祥の地は茨城県の鹿島です。正確な年号はちょっと忘れてしまいましたが、天平何年です。春日の地に鹿島神がご影向をなされたということです。影に向かうと書いて、「ようこう」と読みます。要するに、神様が現れるということです。その鹿島神が春日の地に現れた時に乗ってきた乗り物が鹿なのです。空中を飛んで来たわけですから本家本元の鹿の産地は、実は鹿島であるということですが、鹿島は鹿が滅んでしまいましたから、今は別の場所から貰ってきて飼っています。

それから、私が日本の役人がけしからんと思うのは、茨城の鹿島市が成立した時に、もう九州の佐賀県に鹿島市があるから、同じ鹿島市を名乗るのはけしからんと文句を付けたわけです。言っちゃ悪いけど、九州の鹿島市というのは、鹿島の神様とは何の関係もありません。要するに、勝手にここが先に名乗っちゃったのです。それで本家本元の鹿島市には名乗るなというのです。そういうのはいっぱいあります。太田という地名は日本中にいっぱいあります。しょうがないから、茨城県は常陸太田市にした。でも、地元の人に行けば、太田、太田としか言いません。わざわざ常陸なんか付けません。だけど、先着順というのは厳しいですよ。まして、鹿島市という信仰に関わる名前を先着順で決めてしまうのは厳しいです。言っちゃ悪いけど、ほんと、役人というのは横暴です。

それから、これはガラッと場面が変わって、今の春日神社と日枝神社の東側を周って、大杉の根元の東側に行きますと、こういう石塔が建っています。この石塔は六角石造宝幢といって、南朝の中心人物、楠木正勝公の墓と書いてあります。この人は、湊川の戦いで有名な楠木正成の孫に当たります。これは昔から言われていることですが、南北朝の戦いで北朝に負けた楠木正勝は、身を隠すために虚無僧になって、全国を放浪した。そして筑波山に来て、古通寺（こつうじ）という虚無僧寺に入った、という伝承が伝わっております。その伝承に従って、南朝の中心人物、楠木正勝公の墓と、地元の人が示したわけですが、困った事に、良く調査すると14世紀末から15世紀初めの石造物になってしまい、楠木正勝の年代とぴったりに合ってしまうのです。まあ、伝承通りなのかも知れませんね。伝承というのは本当の事を伝えている場合があるので、油断出来ません。でも、正勝が来たという実際の証拠は何もなくて、その伝承しかありません。が、この石塔の丸みやこの軒、それに堂々とした全体のプロポーションを見ると、正に14世紀末から15世紀初めに出来た物だと分かりますので、伝承通りということになりますが、そうは言っても、この下を掘って、中に骨壺があって、骨壺に正勝と書いてあった時初めて明言できるわけで、今は

迂闊なことは言えません。

これはさっきお話しした、廃仏毀釈で崩されなかった唯一の五輪塔で、他の五輪塔は全部、廃絶されました。何故これだけが助かったかと言うと、これは徳川家康の時に、筑波山を徳川將軍家の祈願寺にした時のお坊さん、光誉上人という人のお墓だからです。筑波山中禅寺の礎を築いた人ということで、これだけを残しました。この人が、通称、「がま仙人」と言われている人です。光誉上人は祈祷僧として大阪夏の陣、冬の陣の時に家康に従って、大阪に出向きます。伝承ではその時に大阪で怪我をした人を治療した薬が、がまの油だというのですが、これはまあインチキな話でしょう。

ご神宝が幾つかありますので、ご覧頂きます。これは、柿本人麻呂ですが、「三十六歌仙絵額」と言いまして、36人の有名な歌人を絵にし、その人達の歌を文字で書き表して、大御堂に飾ってあったものです。現在見られるのは、日光東照宮のご本殿に上がると、欄間にこれが掛かっています。日光東照宮の欄間の絵は、狩野探幽の甥っ子さんが書いた物です。筑波山のは探幽だから、やっぱり素晴らしいです。

これには面白い話があります。神社ではこういう神宝をしまっておくのですが、この裏に狩野采女正（うねめ）と書いてあります。しかし、采女正という名前は誰も知らないから、粗末に扱っていたわけです。それで、私が采女正は探幽ですと言った途端、現在は金庫の中にしまわれています。それまでは乱暴な扱いをしたから、雨露に当たったり、かびが生えたりしています。今は誰にも見せない。私の行く時だけは出してくれます。まあ、素晴らしい絵です。これは在原業平で、女たらしで有名ですね。見てください、羨ましいくらいの美男子です。次がかの有名な小野小町です。話しは変わりますが、何故町針と言うか分かります？若い人、町針を知っていますか？要するに、普通の針は穴があるわけです。町針は穴がない。小野小町は穴なし小町と言われる。どの穴だか分かりますよね？

これは、筑波山神社にあります花卉双蝶八鏡です。二本の花弁と二羽の蝶を表しています。これは今から1200年位前の物です。驚かなで下さいね。これを拾ったの誰だと思いませんか？実は私が拾いました。筑波山の中に落ちていました。これは1200年経っていますが錆びていないです。テレビの受け売りじゃないけど、いい仕事しているというのはこういう事です。今もまずい仕事をする5年後には錆び付いて、どうにもならない。何処に落ちていたかは言いません。多分、筑波山中に、まだまだこういう物は落ちていると思います。だから日光男体山では、銅鏡とか素晴らしい宝物が出ましたけど、筑波山信仰は日光に負けず劣らずなんです。これから、若い人達が筑波山の発掘を担ってくればいいなあと思います。

これは絵葉書です。「明治42年10月19日、登山記念、常陸山谷右衛門」と書いてあります。これは何のために登ったかと言いますと、ここに、筑波石があるのですが、こうやって手を当てているでしょ？実はここに、常陸山谷右衛門の手形が彫ってあります。これは今でも、筑波山上のケーブルカーの駅近く

に残っていますから、探してみてください。その手形石を上げた記念に、この常陸山が登った時の写真です。この時は明治42年ですので、まだケーブルカーは出来ていないですから、前からお弟子さんが2人で引っ張って、後ろから、もう1人のお弟子さんがケツを押して登ったわけです。それにしても、この石を上まで引っ張り上げた人は偉いと思いますよね。

これで神社を離れて、やっと山へ登ります。これが、正確なことは忘れてしまいましたが、大正7年に筑波鉄道が開通して、大正年中に筑波山ケーブルカーが出来た時の駅のスライドです。では発車します。やっぱり昔の方が価値ありますね。この茶店はついこの間まで残っていました。歩いて登る場合は、この脇を通るのが基本です。この登山道を登るとその先にトンネルがあって、トンネルを越して次の所に男女川の茶屋というのがありました。小さな茶店でした。男女川の流はこの竹の樋（たけのとい）です。子供が水道の蛇口から水を飲んでいるみたいですね。普段はこんなものです。残念ながら、この男女川の茶店はなくなって、江戸時代に建てられた碑だけが現在は残っているそうです。

これが上の駅で、この辺はまだ工事の残骸があります。でも、ケーブルカーが出来る前はどうかと言うと、これが五軒亭という、5軒あったお茶屋さんです。ちょっと見にくいですけど、ここには、依雲亭と書いてあります。ついこの間まで依雲亭は残っていたのですが、こういう華のあるお茶屋さんもケーブルカーが出来た時に、こちら辺一帯は全部立ち退いて、広場が作られてしまったわけです。吉田松蔭も来ています。吉田松蔭という人は変った人ですけどね。東北遊日記というのが残っています。やっぱり、筑波山に登って、ここで漢詩を詠んでいます。下手くそですけどね。

やっとラストに達しました。これは筑波山の頂です。男体山、女体山はご覧の通り、今と変りありません。これが立身石（りっしんせき）の所にある、水海（みうみ）の地と言われている場所です。立身石には親鸞上人がここへ来て、地獄の餓鬼を救うようにお祈りしたという伝承があり、間宮林蔵が自分の立身を祈ったという話もあります。だから、この水海の水には親鸞上人の伝承が伝わっていますから、新潟県辺りの人がわざわざこの水を汲みに来ます。地元の人からはらっきし行きません。それからここが「御幸ヶ原」です。現在はここにお茶屋さんがあり、今は水道を使っていますが、昔、水道がない時代はこの池の水をお茶に利用していましたので、案内された時によっぽど古いだろうと思い、この井戸の所の周りを穿てみたら、奈良、平安時代の土器が出て来ました。

問題はこの平地です。女体山と男体山の間はこの平地を御幸ヶ原といいます。でも、筑波山は元々この2つの峰ではなくて1つの峰でしたが、ある時期に山がずり落ちて2つの峰が出来ました。昔はずり落ちた線が見えたという話がありますが、私は生まれてないから分かりません。これが御幸ヶ原のスライドです。これにはどういう意味があるかと言いますと、別にここにいたから幸せになれるということじゃないですよ。天皇陛下がお出ましになるのを「行幸」

と言います。皇太子妃や奥さんが出て来るというのは、男尊女卑ですから「行啓」と言って差別がついていて、それで天皇陛下がお出ましになって来る時は「行幸」と言いますが、この「行く」、「幸い」ですけど、「ぎょう」も「こう」もどちらもお出でになる、お出かけになる、渡らせられるという意味ですので、御幸ヶ原の「みゆき」というのは偉い人がここにお出ましになると意味です。

ここから先は独断と偏見ですからね。そうしたら、偉い人は何処にいるのかと言ったら、ここにいるわけです。これとこれが、男体山と女体山の神が、お出ましになるわけです。そして、出てきた所でどうなるかと言うと、神様だって男と女であることは変りなしですから、やることはやるわけです。

これで打ち止めにしますが、筑波山信仰というのは、そういう風にして日本人の歴史、信仰を残しているわけです。このセックスの結果お生まれになる神様をお迎えするのが、私は筑波山神社の特殊神事である、御座替祭りではないかと思っております。それは後のお楽しみのお話しにしたいと思っております。

以上です。時間掛かりましたけど、上まで行きました。今日は、どうもありがとうございました。

ここからは質疑応答のやりとりです。

質問：最近、話題となっている石器を埋め戻しをしていたことについて

答え：一言で言えば、日本の学会というのがまだ未熟だと、私は痛感しております。もっと学者間で本物かどうかを真剣に協議されていれば、あんなことは起こり得ないのです。それが見過ごされたところに、私は日本の考古学ばかりではないと思っておりますが、色んな面で、まだ未成熟な所があるのではないかと思います。

質問：お寺は中禅寺というのがあったと言いましたが、日光の中禅寺とは関係あるのでしょうか？

答え：これは難しい質問で、頭が痛いですね。筑波山は一応、徳一さんというお坊さんがお寺を開いた所です。日光の男体山、並びに中禅寺は、勝道上人です。年代から言いますと、生存期間は徳一さんと勝道さんは重なっています。ただ年齢から言うと、徳一さんの方が少し上かなという感じがしていますが、徳一さんの正確な年齢は分かっておりません。どうして中禅寺という名前がどちらとも同じに付いたかというのは、結論から言うと分かりません。ただもう1つ私は、実はこういうことも含めて、重大な問題が潜んでいると思います。これも30年の道楽のお陰ですけど、筑波山を中心としてこの表の山も裏の山も、実は徳一以前からお寺が開かれていたのです。これから推測すると、徳一は700年代のある時代に生まれて、800年代の半ば頃に死んでいますが、7世紀から8世紀の瓦が発掘で見付かっているから、私は筑波山に仏教をもたらした僧侶の群があり、それを代表する者として奈良から来た徳一の名前だけが残ったのではないかという気がしています。すると勝道上人だって、筑波山

と無関係ではないだろうという感じはしますね。大体こんなところです。

質問（省略）

答え：要するに、応永の中興という言葉を使うのですが、室町時代以来、筑波山をもう1度興した人達の中で、多分光誉上人は3代目か4代目の人です。光誉上人は、大阪冬の陣、夏の陣に家康が大阪城を攻める時に、戦争を勝つようにお祈りする戦争祈願のために、一緒に行くわけです。伝承としてはその時に筑波山からガマの効薬を持って行き、傷付いた戦士に擦って、ガマの効用を知らしめたと言われていますが、インチキに決まっているじゃないですか。それから、まだ詳しく調べてないですが、最近分かってきたのは、光誉上人は徳川秀忠2代将軍の乳母の肉親者である可能性が強いです。そのお陰で、家康と一緒にいる機会を持ったのではないかと思います。まだその証明ははっきり出来ていません。

質問（省略）

答え：さっき打ち止めしたのは、御幸ヶ原で男の神様と女の神様がセックスして子供が生まれ、私はその信仰がかがいと何処かで結び付くと思います。それは“かがい”の話だから、今日はここで打ち止めにした。しかし、万葉集によると、高橋虫丸という人の歌が出ていて、それが“かがい”の歌とされています。

質問（省略）

答え：1つには、日本人というのは移り気な人が多くて、流行ばかりを追い掛けていたのではないかと思います。で、戦争終わったら民主主義になったのです。それと同じ様な現象が過去にもあったと私は思います。もう1つは、日本人の宗教自体がこだわりを持っていなくて、何でも信じていたからだだと思います。だから極端に言えば、どうでもいいというところがあると思うのです。ただ、明治維新の廃仏毀釈が何故起きたかというのは、極端に言うと、光圀の時代まで遡る話だから、江戸時代300年間の問題が潜んでいます。今日は勘弁して下さい。